同館だより

〈高知県立歴史民俗資料館だより〉 第21号 1996年10月1日

秀吉ブームについて思う

大阪城天守閣館長　渡辺　武

NHK大河ドラマ「秀吉」の放送を機に、秀吉に関する出版物が東京を中心に全国で次々に姿を現し、大阪でも大手の本屋さんの店頭には信じられないほど多種多様の単行本やムックなどが山積みされている。しかし、市販されているこれらの出版物は、実は、今回全国的に巻き起こっているいわゆる秀吉もの出版物の膨大さから較べれば、ほんのごく一部分にすぎない。

秀吉ものの企画は、市販の出版物の他に各種民間団体・企業・地方公共団体・教育関係団体等の機関誌紙・広報誌紙などの掲載記事にあふれている。さらに、展覧会・博覧会・講演会・講座・放送番組、等々、きわめて広範多岐にわたる。それらにさまざまの度合いで関わり、今年一杯そこから逃れられそうもない私自身にとっても、このような秀吉ブームは無視しがたい現実である。

今春以来、秀吉に関する二種類の展覧会を通じて、秀吉ブームの新しい傾向をうかがうことができた。一つは、四月二十三日から五月二十六日、大阪市立博物館で開催された同館とNHK大阪放送局・NHKきんきメディアプランの共催による「黄金と侘び　秀吉展」である。この特別展は、約十五万人という記録的な入場者数と見学者の前例を見ない活気で忘れられないものとなった。ここで見落とせない特徴の一つに、これまでの秀吉展では中高年層に著しい片寄りの見られた見学者に異変が生じ、若い男性・女性の姿がかなり増えたことが挙げられる。この特別展は、その後、東京と名古屋でも開催されたが、同じ傾向が見られた。

もう一つは、岐阜市歴史博物館・北九州市立美術館・北海道立近代美術館・福島県立博物館そして高知県立歴史民俗資料館と毎日新聞社との共催による「秀吉と桃山文化―大阪城天守閣名品展」に見られる動向である。この巡回特別展も四月の開幕以来、各地で通常の特別展をかなり上まわる人気を博し、しかも入場者は、右のNHK共催展と同様、これまでにない年齢層の拡がりを示した。ことに六万三千人もの入場者数を数えた北九州市立美術館にその傾向がはっきりみられた。

秀吉と秀吉の生きた戦国の世が、今とくに日本の現代人に親近感と共感を呼び起こしているのは何故なのか。ことに、新たに若者の興味をもひいているのは何故なのか。NHK大河ドラマの持続する高視聴率とともに、秀吉に関連する特別展への新しい人気に接し、改めて考えさせられる。

秀吉と戦国ブームにはいくつもの要因があろう。例えばNHK「秀吉」の若者人気の背景には、「シャルウィダンス」などユニークな映画や舞台で人気の高い竹中直人という主役俳優の影響が軽視できないし、視聴者層の拡大にはドラマの現代サラリーマン社会風の仕立ての面白さによるところも大きいだろう。しかし、秀吉・戦国ブームが過去最高といってよい高まりを見せているのは、もっと別の理由も大きいのではあるまいか。

能力・実力本位の自由競争社会というたてまえにもかかわらずいちじるしく社会が閉塞し、いたるところに二世、三世が横行し、学歴や財産が幅をきかす現状。理想や夢や情熱が語られることの余りにも少なくなった日本の現代社会。今や探しても見当たらぬ力強く魅力的な政治リーダー。それを戦国の英雄たちに求める心情。長引く不況の憂うつさをひととき忘れさせる秀吉の豪放磊落（らいらく）な笑い声。等々。いろいろ、かなり根は深そうだ。

開館5周年記念

秀吉と桃山文化

大阪城天守閣名品展のみどころ

野本　亮

（写真①）

前号では本展の概略を紹介したので、今回は主要な展示資料の幾つかを解説しながら、ストーリーを概観してみたいと思う。（解説は秀吉展図録より引用した）

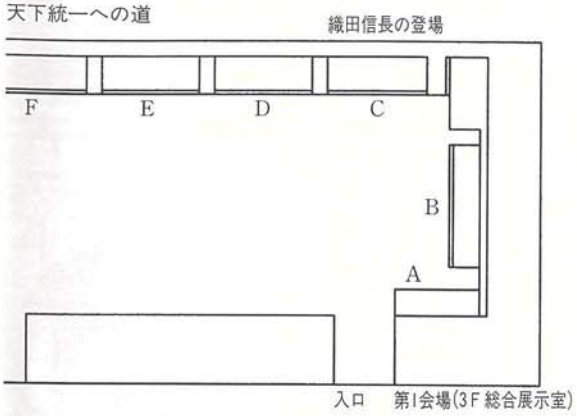
〈織田信長の登場〉第一会場　C

このコーナーでは、

・斎藤道三遺言状（弘治二年・岡本家蔵）
・足利義昭御内書（元亀三年）
・織田信長黒印状（天正三年）
・長篠合戦図屏風
・安土城図
・金箔押唐草文軒平瓦片（安土城跡出土）
・顕如上人画像（浄安寺本）

などの資料を用い、信長の登場から安土城築城までを、彼と敵対した人々と共に描いてゆく。写真①は『木瓜桐文緋羅紗陣羽織』で、信長より秀吉が拝領したものと伝え、緋羅紗地に白羅紗で木瓜紋と桐文とがはめ込まれている。木瓜紋は織田家の家紋として名高く、装飾的にあしらわれた桐文はこの時代に流行した文様である。

〈天下人秀吉〉第一会場　D～I



本展の中核をなす展示である。信長の一武将時代から全国平定までを、圧倒的な資料群でドラマチックに演出する。展示資料は

・木下藤吉郎等織田家奉行衆連署状
・明智光秀自筆書状（年未詳）
・柴田勝家書状（天正一一年）
・縹糸下散紅威胴丸（秀吉より脇坂安治拝領）
・金箔押菊文大飾瓦（大坂城跡出土）
・大身笹穂槍〈銘〉正利（丹羽家蔵）
・池田恒興画像
・豊臣秀吉朱印刀狩条目（写真③）
・聚楽第図

などを予定しており、中でも写真②の『賤ケ岳合戦図屏風（右隻）』は、天正一一年（一五八三）四月、秀吉と柴田勝家が琵琶湖北方の賤ケ岳で全面対決した時の様子を描いたもので、左右にはそれぞれの本陣が、そして中央部には〝賤ケ岳七本槍〟の場面があり大変興味深い。

Iの〈秀吉の一族〉では、正室北政所（お祢）宛の『秀吉自筆書状（重美）』に注目したい。「松風以下一〇番の能を覚えた。これからも喉をからして練習するつもりだ」という内容で、上達の速さを自慢する文面に彼の性格がよく表れている。

〈太閤秀吉と桃山文化〉第一会場

J～M

（写真③）

（写真②）

本展の最も華やかなコーナーである。

ここでは

・猿猴捕月図蒔絵胴
・金銀象嵌南蛮兜
・富士御神火文黒黄羅紗陣羽織
・秋草文蒔絵硯箱
・千利休画像
・芦屋釜（伝織田有楽斎所用／個人蔵）
・瀬戸内海・西海航路図屏風
・カルサン（丹羽氏次所用／丹羽家蔵）

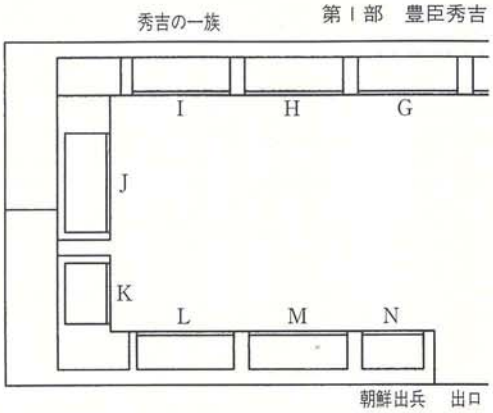
などの資料により、戦国の世を終わらせた天下人たちの絢爛豪華な文化を垣間見る。武将たちが個性を競い合った各種の武具をはじめ、堺や博多の豪商がもたらした海外からの文物、千利休が完成させた茶の湯関係の資料は、観る者を圧倒する。写真④は、著名な『南蛮屏風（大阪府指定）』である。

（写真④）

一六世紀末頃のポルトガル人とその交流の様子を写しとった風俗図で、右隻には南蛮船の入港と、カピタン（船長）一行の様子が描かれている。また、このコーナーの最後には「朝鮮出兵」（N）に関する資料も展示する。

天正二〇年（一五九二）三月、天下統一を完成した秀吉は、かねてから抱いていた明征服の野望を実行に移すため、朝鮮への進攻を開始した。

文禄の役に際し、秀吉が脇坂安治、九鬼嘉隆らに壱岐から対馬へ進軍を命じた書状や、高麗（朝鮮）に宛てて出された禁制、日本水軍の中核となった九鬼水軍の戦陣図（模）や九鬼家の定紋が染め抜かれた幟などは、いずれも侵略戦争の数少ない関係資料であり、「天下人秀吉」の狂気を十分感じていただけると思う。



〈豊臣秀頼と大坂の陣〉第二会場

（企画展示室）

ここでは、秀吉の死から豊臣家の滅亡、大坂城再築までを次の資料などによって描いてゆく。

・伝豊臣秀次介錯の刀（雀部家蔵）
・石田三成書状（文禄四年）
・豊臣秀吉自筆辞世和歌詠草（重美）
・関ケ原合戦図絵巻
・徳川家康二十将図
・秋草文彩画団扇（伝淀殿所用）
・大坂夏の陣図屏風（国重文）
・豊臣秀頼自筆六字名号（柴原家蔵）

写真⑤は秀吉の死後に製作されたもので、唐冠をかぶり、右手に笏をもち、束帯姿に威儀を正した秀吉神像の一種である。精悍で気力あふれるその容貌に、秀吉の個性がにじみ出ている。

なお、「地域展示」は、第一会場中央部と企画展示室の一部に設定する。

長宗我部元親の土佐平定から秀吉に降伏するまでと、羽柴土佐侍従として生きた晩年から長宗我部家の滅亡までを中心に約三〇点を展示する。

展示資料の多くは展示制限があり、期間中一度展示替えを行う（前期一二月三日～二七日・翌九年一月五日／後期一月七日～二六日）。すべてを堪能されたい方には二度御来館されることをお勧めしたい。

（写真⑤）

ひと7 小川（おがわ）真喜子（まきこ）さん

小川さんは土佐民俗学会会員として長年、女性ならではの視点で民俗を調べています。春野町文化財保護審議会委員や当館資料調査員をなさるなど、八面六臂のご活躍をなさっています。

先日、弘岡の小川さん宅にお邪魔してお話を伺い、手作りのアタラシヤ餅まで御馳走になりました。小川さん曰く「人に物をさしあげる時には、カビが生えた餅より出来立てのイモぞと、母に教えられた。だからこの餅も作りたてよ」そんな小川さんが暮しの中で培ってきた民俗のお話をたっぷり聞かせていただきました。

昔の人の知恵

まぁ、物好きなんですね。なんでも興味があるんですよ。

例えば手拭、腰巻、前掛け、風呂敷、首巻きなど――これらは直線でできているでしょう。断ったり縫ったりする技術がほとんどいらない平たい布で、いろいろな使い方ができる。昔の人の知恵ですよ。

手拭のこと

昔は日本髪はピンツケ、普段でも椿油などを付けていてほこりがつきやすいので、掃除などをする時は必ず手拭を頭に被りました。手拭をすることによって仕事をする気構えもできます。昔の女性が働く姿は手拭、たすき、前掛けです。人様に会った時は手拭を取り、たすきを外してご挨拶するのでした。

手拭は便利なものでね。山に行くときに手拭をひとつ持っていると、汗を拭くこともできるし、谷間の水で洗って干しておくと休む間に乾くでしょう。鎌で指を切ったり、ひっくり返って膝をすりむいたり、山に入るということには思わぬ危険が伴うわけですから、咄嗟のときには手拭を引き裂いて蓬（よもぎ）をつけて応急処置に使ったりしました。

その他、草履の鼻緒が切れた時にやはり手拭を引き裂いて代用したりしました。ちょっとした心づけ、又お使いものとして人にあげたりもしました。亡くなった人の旅立ちにも、手拭を棺に入れるということもしていました。

昔は手拭を非常に大事にしたんです。折り目のついた手拭をすると丁度嫁さんの角隠しのようで、ひとに良い印象を与えるものです。反対に汚れた手拭をしていることは恥かしいことでした。煮しめたような手拭などもってのほかでしたよ。不潔にしないことがたしなみでしたね。

腰巻のこと

小さいときは下着なしで平気ですが、大きくなって恥ずかしい感情ができてきたら腰巻をするわけです。腰巻にはいろいろ種類がありましたよ。冬はネルの腰巻、夏は絽（ろ）。赤は若い人、桃色は中年、老人は白。

腰巻というのは足さばきが良くないといけません。店でその人の身体に合わせてカネ尺で切り売りしているのを買ってきて、いい具合に重なるように縫うたものです。普通四尺二寸位で、上にサラシ木綿半巾を縫い付け紐を付けていました。

私は高知市の第二小学校に通っていました。五年生のときには身体検査の時に腰巻をしていた人が数人いたことを覚えていますが、六年生のときには一人もおりませんでした。昭和七年のことです。

腰巻の下に着ける丈の短い腰巻に、こうし巻というものがありました。洗うということがたいへんなんですから、汚さないということが肝心だったんですよ。お金も取る勘定より、使い勘定いうてね。だから汚れたこうし巻だけかえて洗濯するようにして、腰巻の洗濯回数を少なくしていたんです。

腰巻には保護するとか温めるとかいろいろ役割がありました。踊り用の見せる腰巻は今でもありますね。今と違って昔は歩くでしょう。私たちの若い頃、天気の悪い日に揃ってお出掛けするようなときには、帰りに大雨が降ったりすると、着物を汚さないように帯に裾をはさんで歩いたものです。すると腰巻が見えますでしょう。冬は裏打ちをした花模様のものが多かった。若嫁さんたちが尻まくりをして連れ立って歩くのも、風情があって傍目にもなかなか良いものでしたよ。

男の人は褌（ふんどし）ですわね。昔は褌のことを六尺といいました。赤褌は珍しかっ

たものですね。昭和二、三年頃のこと、日下駅前に通称「赤褌のおんちゃん」と呼ばれている人がおりましたよ。赤褌の赤は呪（じゅ）でしょうか。

前掛けのこと

前掛けは、反物の余分などちょっとした端切れで作ったものでしたよ。店屋が店の名前を入れた前掛けを宣伝にくれたりもしました。

前掛けにはいろいろ用途がありましたよ。ごちそうの丼を前掛けで被いお隣に持っていく姑の姿、人様の訪れに急いで水に濡れた手を前掛けで拭きつつ出ていく母の姿が目に浮かびます。お隣のおばさんが蜜柑（みかん）や枇杷（びわ）を前掛けで包んで持ってきてくれた時の嬉しさといったら……。

風呂敷のこと

風呂敷は大巾を真四角に縫い合わした大きさでした。風呂敷は手拭といっしょで、お使いものとしてひとにあげたりしましたが、手拭よりは上等としたものでした。「嫁くばり」といって、嫁を連れて姑が近所に挨拶にまわるときに、嫁の名前を書いた熨斗（のし）を乗せて、風呂敷を差し上げたりしましたね。熨斗をちょこっと折るということも女のたしなみでした。あげてもさげても親の教育。母親のせいになりましたから。

風呂敷には木綿をはじめいろんな材質があって、用途によって使いわけるんです。親戚のお慶びや不幸のときに、風呂敷に式服を入れていったものです。嫁入り支度に入れてもらったのは実家の紋入の紫の大風呂敷でした。そのまた昔の大風呂敷は木綿の藍染でした。「あそこの家の葬式は紋が揃うちょった」と言ったものです。そうしたことがその家の格を示したのです。

心にしみた恩師のことば

私は二〇年前に春野町の文化財審議委員になりました。それまで女性の委員はいなかったんですよ。

この道を歩んできたのは橋詰延寿先生にお習いしたことが大きかった。私は家の都合で進級組に入れなくて涙が出る程つらかったのですが、その新学期に教壇に立ったのが橋詰先生でした。先生は「人には自分ではどうすることもできない立場というものがあるから、そこに立って自分の足元を見よ。そしてその足元に何かひとつを見つけよ。ひとつのことを五年一〇年、二〇年、三〇年やってみよ。そうすればなんとかなる」とおっしゃいました。

何かを見つけようと思いながら三〇年が過ぎてしまいましたね。戦後の生活が、ずっしりと肩にかかりながらの三〇年です。

数えの二〇歳で嫁入りして、姑との間はうまくいっていたのですが、それまでやったことのない農業をして、随分苦労をしたものです。けれどその中で新しい発見もありました。農作業をやりながら舅や姑の話に耳を傾けてきたことも橋詰先生がおっしゃっていた私の「何か」に繋がっていたと思うのです。

例えば蕪（かぶ）（弘岡カブ特産）を一畝ひいてふたつずつ括っていくと、いろんな形の蕪があるけれど、一畝の中にちゃんと似合うたものがあるんですよ。それをくくり合わせることから、姑は「人も似合うたもんが縁があってくくり合わぁよ。」と言うていました。姑とうまくいっていたのは、味噌や醤油の作り方、洗濯物の仕方、何でも習おうという姿勢と姑を大事に思う気持ちからでしょうね。

「それから」と「これから」

三〇年目に、成城大の先生をされていた鎌田久子さんが「友達になってください」という手紙を下さいました。そこで「私はただの田んぼのおばさんですよ」とお返事を書くと「あなたには私に無いところがあります」とおっしゃる。この鎌田さんの来高を機に、桂井和雄先生にお目にかかって土佐民俗学会に入りました。

橋詰先生をはじめとしていろいろな方とのご縁をいただいて三〇年目にようやく私の「何か」は民俗だとわかったのです。日常の生活がそのまま民俗調査に繋がっている。自分の生きてきた様、周囲の事、身近な生活の中に民俗があることが分かりました。

それから更に三〇年たった今、ようやく自分の時間も持てるようになりました。少しでも勉強したいので、土佐民俗学会の談話会や、春野町のいろいろな会に出ています。

橋詰先生には亡くなられるまでの五〇年教えていただきました。私は本当に橋詰先生をはじめ、師と仰ぐ多くの方に恵まれました。橋詰先生の「足元を見よ」とのお言葉を思い思いの六〇余年です。

そして、これからも多くの方々のご指導が必要です。私の住んでいる春野町西根木谷にはさまざまな行事が残っており、現在まで受け継がれております。弘岡下ノ村の村政を預かった方々の資料をはじめとするいろいろな資料も、枯葉が吹きだまりに集まるように私の手元に集まってきています。私は自分の力不足は十分わかっていますが、多くの方々のお導きを戴き、それらを整理して、少しでもわかりやすいよう後世に書き残してゆきたいと願っております。

（文責　中村）

〈研究ノート〉

長宗我部元親奉納の三十六歌仙扁額

―「秀吉展」地域展示資料から―

野本　亮

一昨年の夏、「四国の戦国群像」展の準備をしていた私は、長宗我部元親の数少ない遺品である、岡豊別宮八幡宮の扁額歌仙絵を調査する機会を得た。

この歌仙絵については、すでに森暢氏によって裏面の墨書に関する問題点が指摘されている[1]。本稿ではその要旨を紹介すると共に、調査記録に基づいて同資料の背景を探ってみたいと思う。

現在、八幡宮が所蔵する歌仙絵は十四面しかない。文化八年（一八一一）の『土佐国古文叢』の記録を見ても同様の数量なので、残りの二十二枚は江戸末期頃までにすでに散逸していたようである。

森氏は同資料の現状について、

「…各画面の中に補筆の跡が散見せられ、資料本来の価値を台無しにしている。だが、部分的には本来の色彩（赤・白・薄緑）や線描を残しており、往時の姿を偲ぶことができる…」と述べている（一部要約）。

これまでこの歌仙絵については、永禄三年（一五六〇）に初陣を果たした元親が、本山氏に対して大戦果を上げたことを八幡の神に感謝するための奉納品であったと解釈されてきた。そして、その根拠としては『土佐国編年紀事略巻五』の

同年冬十一月十一日長宗我部元親画工眞重ヲシテ三十六歌仙ノ像ヲ画シメ……〔略〕八幡宮蔵三十六歌仙裏書

という記述が主に採用されている。

末尾の註記から、編者の中山巌水が実際に歌仙絵を調査したことが確認できるが、彼がどの扁額の裏面を見たのかは記されていない。現存する十四枚のうち、裏面に永禄三年の墨書があるのは「左七番中納言兼輔」（写真A）のみであるが、彼はこれを見て筆写したのだろうか…。

これより三十数年前、武藤平道は『土佐国古文叢』の中で、

永禄三年辛酉十一月十一日願主秦元親…〔略〕

右一通長岡ノ郡八綿村八幡宮所蔵ノ三十六歌仙ノ裏書ナリ凡テ六通ノ第二紙

と同資料のことを記し、扁額以外にも社宝に関する文書があったことを伝えている（彼は扁額自体を見ていないようである）。また、この武藤の協力者であった稲毛実は、著書『白頭雑譚巻四』の中で、「余ノ家ニ豊岡八幡宮ヘ秦氏奉納ノ三十六歌仙絵馬一枚ヲ蔵ス。裏書ニ云ウ。坂上是則（左十五番カ）永禄三年辛酉十一月吉日…〔略〕」と書き記し、前述の「左七番」以外にも「永禄三年」の扁額があったことを教えてくれる。

以上のことから私は、この江戸時代の歴史家たちは、関係文書もしくは散逸した一枚（稲毛蔵）の裏書以外は実際に見ていないのではないかと考えている。

なぜなら、裏面に異なる記載をもつ歌仙絵が、実はもう一枚存在するからである。

「右十八番中務」（写真B）の裏面には、

永禄三年辛酉十一月吉日願主秦元親

との記載があり、前述の「左七番」と比較すると「永禄三年」が「永禄三年」、「十一月十一日」が「十一月吉日」という具合に、微妙な相違点があることに気付く。

他にも、左右十八番までの歌仙を対比させる形で作られ、最後の「右十八番中務」に願主や右筆などの記載が多いのに対し、「左七番」の記載は不自然であること。「左七番」の干支は「永禄三年辛酉」となっているが、「辛酉」は永禄四年の干支であること。「右十八番」の流麗な筆跡と比べると、いかにも稚拙で違和感を伴うことなどは、いずれも十四枚すべての扁額を見ればすぐ分かることである。

また、森氏は、後世の誰かが（何らかの理由で）「右十八番」の記載を他の「左七番」や「左十五番」の裏面に書き写した際に、「二」を「三」と見誤り、その誤写された方が今日まで信じられてきたと指摘されているが、これも十分に説得力がある。

いずれにせよこの「右十八番」の存在により、元親が歌仙絵を奉納した年は永禄四年となり、従来の説を訂正しなければならなくなる。

本来この歌仙絵奉納については、「初陣の年」（永禄三年）に固執する必要はなく、むしろ、文亀三年（一五〇三）の大平国雄による小村神社への歌仙絵奉納などに見られる、土佐の国人層全体の文芸に対する意識[2][3]の中で捉えてゆく方が自然ではないだろうか。

註

(1)森暢「歌仙絵拾遺（二）」（季刊『古美術56』）一九七八　三彩社）五六～五九頁

(2)下村效「土佐の国人大平氏とその文芸」（『戦国・織豊期の社会と文化』一九八二　吉川弘文館）

(3)大平氏と長宗我部氏の結びつきについては朝倉慶景氏のご教示を得ている。

（写真Ａ）

（写真Ｂ）

本棚

秀吉の本

大河ドラマの影響でしょうか、書店の棚で秀吉関係の本を見かけることが多い昨今です。

当館の体験学習室にも『豊臣秀吉のすべて』（桑田忠親編　新人物往来社）『豊臣秀吉』（河出書房新社）『図説太閤記』（毎日新聞社）『豊臣秀吉』（小和田哲男監修　日本放送出版協会）『大坂城』（学習研究社）などの本や雑誌があり、いつでもご覧いただけます。

さて、数ある秀吉本の中でも今年特に注目したいのが、大阪城天守閣館長渡辺武氏の『豊臣秀吉を再発掘する』（新人物往来社）という本です。

35年のキャリアの中で氏が発掘した関係資料をもとに、「大坂城」と「秀吉」について優しい語り口で解説してくれます。大坂城の古絵図と最新の発掘データによる秀吉時代の大坂城の復元や、秀吉の自筆書状の特徴に関する鋭い見識は他の追随を許しません。

また、各地に現存する秀吉の肖像画に関する論考では、「秀吉ってどんな顔をしていたのだろう」という素朴な疑問に対して、一つの答えを提示されています。「黄金の茶室」の原寸大復元模型製作にまつわる数々のエピソードも、秀吉の美意識を知るうえでの手がかりを読者に与えてくれます。後世につくられたイメージを拭いさり、素顔の秀吉に迫りたい方には必携の一冊かもしれません。

（二二二頁　定価二八〇〇円）

ユア・ボイス

9号を最後に途絶えていたユアボイスを久しぶりに復活します。今回は、4、5月に行われていた「山内名宝展Ⅱ」のアンケートから。

「場所が遠くて知らない人が多いのではないでしょうか。階段が多いので、身障者・年寄りには少しこたえます。しかし、従業員の親切なこと、及び展示等の内容はもったいないほど素晴らしいと感嘆しました。できるだけ多くの人たちに見てもらいたいと思います。」（72才、女性）

当館は敷地が狭いこともあり、階段が多い構造になっています。ですが職員一同努力致しておりますので、皆様おいで下さい。エレベーターもございますのでご利用下さい。

「静かなたたずまいと辺りの景色とマッチした広々とした建物がゆったりと迎えてくれ、手入の行き届いた木々が目にまぶしく（桜の頃も素晴らしかった）時々来たい所です。」（56才、女性）

「もっとＰＲするべき」（女性）との意見も頂きました。当館では、昨年度から企画展ごとに新聞広告を出し、テレビでＣＭを流しています。ご覧になって頂いていますでしょうか。次は企画展への感想から。

「すばらしい高知の宝です。書に対する高い教養に感銘を受けた。仮名など感銘が深い。大切に現在まで保存された山内家に心から感謝したい。」（72才、男性）

まさにこれらの資料を見ることができるのは、これまで大切に守り続けてきた山内家の努力があればこそです。アンケートでも江戸時代の資料が美しく伝えられていることの驚きが多く書かれていました。

その一方、多かったのは次のような意見です。

「展示場が狭いと思います。」（54才、女性）「山内家名宝Ⅰと共に見られなかったのが残念です」（60才、男性）「名宝ⅠとⅡを同時に展示できるスペースがあれば良いと思いました。」（40才代、男性）

当館の企画展示室はそれほど広くなく、今回は2回に分けて行わざるを得ませんでした。一度に多くの資料を、という希望に答えるために、「新発見考古速報展」と「秀吉」は、3階総合展示室の壁ケースの資料を全部撤去して、大規模な企画展を行います。そのため特別展の前後に休館日が必要で、来館者にはご迷惑をお掛けしますが、利用者のニーズに答えるため、あえて実施してみました。ぜひ皆様でおいで下さい。

10～12月の催し物

〔特別巡回展〕

12.3～1.26	秀吉と桃山文化 －大阪城天守閣名品展－	毎日新聞社主催の大阪城名品展を当館の５周年記念展として開催します。秀吉と桃山時代の名品数百点が一堂に展示されます。

〔講演会〕 午後２時～４時　聴講無料　葉書にてお申し込み下さい（定員100名まで。先着順）

12.14(土)	秀吉像を探る	渡辺　武先生（大阪城天守閣館長）

〔子ども歴史教室〕 （定員30名。親子可）※「臼をひこう」は10時から、「秀吉展をみよう」は10時30分からスタートします。

11. 9(土)	臼をひこう	岡豊山のかやぶき民家で引き臼やダイガラを使って昔のくらしを体験します。（電話などで事前受付）
12. 7(土)	秀吉展をみよう１	小・中学生対象。主に３Ｆ第１会場において、戦国～安土・桃山期の合戦の様子を分かりやすく解説します。
12.21(土)	秀吉展をみよう２	小・中学生対象。主に３Ｆ第１会場において安土・桃山時代の甲冑や陣羽織の特徴を解説します。

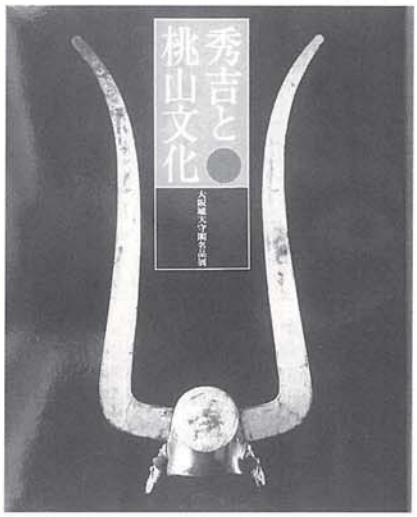
〈地域展別冊〉

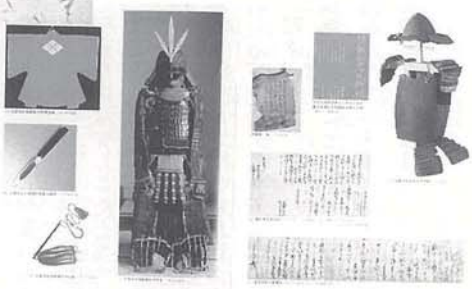
地域展示資料（長宗我部・山内氏関係）33点を全点掲載。オールカラーＡ４版37頁。
※セット販売ですので別売りはいたしません。

秀吉と桃山文化

－大阪城天守閣名品展図録－

大阪城天守閣の誇る名品約250点を特別展のストーリーに沿って全点掲載。巻末には丁寧な解説付き。オールカラーＡ４版250頁の超デラックス版。ご期待ください。





〈ひとこと〉

最近、八井田晋氏より長宗我部盛親の文書をご寄託いただきました。近日中に公開したいと思います。（野本）

梅野氏が日本民俗学奨励賞を受賞されました。おめでとう。（下村）

〔歴民館日録〕

月日	出来事
平成八年	
七月一三日	子ども歴史教室「ジョン万紙芝居」
七月二四日	「第二九回郷土教室」高知市教育研究会
八月一一日	企画展「土佐を掘る94・95」開幕
八月六日	「夏休み子ども教室」南国市立教育研究所
八月一八日	博物館実習開始
八月二四日	博物館実習終了
八月三一日	企画展講演会
九月七日	企画展講演会
九月八日	企画展講演会
九月一五日	企画展閉幕
九月二一日	「新発見考古速報展96」開幕 速報展講演会

平成八年十月一日
編集・発行　高知県立歴史民俗資料館
〒783 南国市岡豊町八幡１０９９－１
ＴＥＬ　０８８８（６２）２２１１
ＦＡＸ　０８８８（６２）２１１０
開館時間　午前９時～午後５時
（入館は午後４時30分まで）
休館日　毎週月曜日（祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日）12月28日～１月４日
入館料　（常設展）大人（18才以上）400円
団体（20人以上）320円
高校生以下は無料
療育手帳・身体障害者（１・２級）手帳・障害者手帳所持者とその介護者（１名）、高知県長寿手帳所持者は無料
印刷・川北印刷株式会社